

言語・文学分野の参照基準検討分科会（第5回）議事要旨

1. 日時 平成23年6月17日（金） 13:00～15:00
2. 場所 日本学術会議6階 6-A(1)会議室
3. 出欠 （出席14名） 庄垣内委員長、塩川副委員長、柴田（翔）幹事、鳥飼幹事、小野委員、川合委員、北原委員、田口委員、寺田委員、長島委員、林委員、福井委員、藤本委員、山川委員
（欠席4名） 加藤委員、川嶋委員、柴田（元）委員、平田委員

4. 議事

- (1) 文学を学ぶことの意味（小野委員）
- (2) 言語・文学の知識と運用能力の学習についての一考察（寺田委員）
- (3) 意見交換

○文学は、他者への共感を可能にする、世界について知る、母語の感度を高める、有効な手段であるということは、文学の根底にある性質であると考えられ、全く賛成なのだが、それを参照基準にどう結び付けていくのかということについても考えていかなければならない。また、フランスのバカロレアは、国家コントロールの部分があると考えざるを得ないが、そこから溢れ出るものを殺さない形で枠の中に流し込むという作業が参照基準には必要なのだろう。

○子供の遊びは中間領域としてあり文学も同様に中間領域としてあるということ、それは一方で国民国家の形成に役に立ち、またそれが今終わりに来ているという把握。国民国家の形成確立にプラスになるような発言をしなければならないということではなくて、それとの関係を考えながら考えを示していかなければならない。バカロレアはフランスにおける一種の理想像であり細かく採点基準も規定されているが、日本の現実を考えるとつい距離の方を考えてしまう。理想とするものにある基準をつくりそれを採点するというのは非常に難しいと思う。

○外国語を学ぶということは他者の文化あるいは社会への入り口であるというだけでなく、異なる言葉の響きなどに触れる喜びがあるということ、そして外国語を学ぶことによって母語が持っているそれを意識化することができるというのはその通りである。また、教科書にある挿絵から何かを読み取ることには、イデオロギーや価値観など多様な要素が関係してくるので、日本でもさらに研究がなされるとよい。参照基準とは別次元の話になるが。

○科学や文学、芸術などのあらゆる能力に長けているという優秀な知識人をフランスは数人輩出しているが、多分そういう人達が生まれてくる素地がフランスにはあり、このバカロレアはその一部分なのだろう。残念ながら日本にはそれらがまだあまりないのだという印象を持った。

○バカロレア受験自体は基本的に最終学年まで行けば受けることができるが、フラン

スは落第があるので最終学年まで行けずに受験することができない学生もいる、また技術バカロレアと職業バカロレアは主要科目でレベルが低く、それらを含めて全体で8割近くの合格率となっている。一般バカロレアはそのうちの3～4割くらいである。

- バカロレア自体は全体で8割近くの合格率になった現在の状況から見ても超エリートのための試験ではないということが言え、それでもこんなに違うというのが驚きである。
- 大学入学資格となるバカロレアを取得し一般的な大学の前期課程に進むが学生がいる一方で、超エリートになる学生はバカロレアを取得した後で一般的な大学に入らず、エリート養成校であるグラン・ゼコールに入学を希望する学生が入る準備学級（クラス・プレパトワール）に進むので、大学の前期課程のところ为空洞化してしまうという問題が生じている。
- バカロレアは最低限の基準なのか、あるいは国が学ばせていることに対する証明なのか判断が付きにくい。
- バカロレアには多様な外国語試験があるが、その中でマイナー言語についてはその言語の授業が開講されないアカデミー地域でも通信教育により指導を受けられる。筆記試験科目は必ず行われるが、オーラル試験科目はその外国語の試験官がアカデミー地域内にいなければ行わなくても良いとされている。しかし許可を取れば他のアカデミー地域でオーラル試験科目を受験することも可能である。
- 母語は親密過ぎるがゆえにかえって書けないというのは、最先端の作家であるからそうなのであって、一般の人にとっては既にある表現によって自分の感情や思考を表現していくしかないように思う。また、日本の大学入試試験では題材を文学に偏らないようにしており、必ず論説文などを入れているが、バカロレアは文学だけを対象としている、論理的に論述しなければならないとなると論説文の方が題材として良いと思う。
- それを課題とするところが正にフランスが自国の文学に対する自負なのだと思う。バカロレアでは論理的で構築的な論述をこなすことが評価の対象となっているが、その能力は小学校低学年くらいから学び始め中学校、高校でより詳しく学び、定型を身に付けていく。その分自由度がなくかえって採点がしやすい。教育とは、教えてから採点するまでのサイクルのことであり、教えるだけでは教育とは言えず、だから採点する基準が必要になる、それは文学でも同じである。
- 確か2000年前後にフランスの学習指導要領が改定され、フランス語の見直しが起こった、伝統的なフランス文学だけではなくて、もっと論理性や構築性をもってより戦略的に語らせることに重点を置いて教えるべきだということになった、その際には、フランス文学が軽視されているということで大激論が起こったと覚えている。
- 今のフランス語の試験では、論説文的なものも入るが、そこに出てくる文章は古典

であり、そのような論説文を通して文学を教養として学ぶことと論理の構築という部分を併せて学ぶことになっている。

- 文学が子供にとっての遊びと同じ中間領域での活動なのだとする、それは普遍化しようがない、10 人物書きがいれば 10 通りあるので、それはスキルとして習得し辛いのではないか。夢みたいな話だが、各大学で作文における表現などをパターンとして共通に教えることができる教科書があれば良いと思う。また、現状の初等中等教育では間違いを正すというマイナスの教育しかしていないので、こうすればプラスになるというような教え方が必要なのではないか、それをサポートできるような参照基準になれば良い。
- 十人十色ではあるが共通して重なる部分も多いのではないか、今は過度に個性が大事だということを言われ過ぎていると思う。その重なる部分を手掛かりにしてポジティブな問いができるのではないか。
- 子供とその中間領域との関係、中間領域の中でどんどん変わっていき、そこから他者を学ぶというのは、正に日本の漫画の特性でもある。そして日本の漫画は、主人公が持っている主観的な世界を客観的に見せるなどの多様な表現法を生み出し、それは世界で一番長けている。また、フランスでは正しく問う型、何かを感じ取ったときにその感じ取ったことを論理的に落とし込むということを訓練させているが、それを作ることが日本の言語・文学の教育でも考えていくべきことなのではないかと思った。また、日本以外の世界でフランスだけは漫画表現論の教科書というがあるので、このバカロレアで図画を入れているということと何か絡んでいるのではないか。
- そのような表現法は江戸時代からずっとあった、誰かが見ている視点を図像として表現している。出版などの文化は中国からきているが、主観ショットは中国にはないだろう。
- ある事象を表現するときに、海外の人は客観的に表現するが、日本人は主観的に表現することが多い。それは言語の構造と関係があり、英語の動詞には物がどのように移動するのかという様態が意味の中に組み込まれていることが多く、日本語はそうではないからであると考えられる。
- 資料 3 の図の B のところをもう少し考えたい、朝の拡大役員会ではそこに公共的言語のような内容の言葉をいれるべきだという議論をした。次回はそこに関連付けて発展していければ良いと思う。次回は少し期間が空くので庄垣内委員長の方で少し今までの議論を纏めて参照基準のたたき台となるメモを作成し提出し、具体的な内容に踏み込んだ議論していきたい。